

作型と特性表

凡例 (浜松地方標準) ● 播種 ■ ポット上げ ----- 育苗期間 ▲ 定植 — 生育期間 — 収穫期間

品 種	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	熟 期	定植後 の日数	株 張 り	球 色	球 形	草 姿	耐 暑 性	耐 寒 性	在 圃 性	説 明	ペ ー ジ
とくみつ	平暖地					●	▲	—	—	—	—	—	—	—	中 生	75~80	大	濃 緑	甲 高 扁 円	開 張 性	○	○	○	水分含量が高く、厳寒期では糖度が 12度前後まで高くなる甘味の強い品種	37
	一般地					●	▲	—	—	—	—	—	—	—											
ふゆみつ	平暖地					●	▲	—	—	—	—	—	—	—	中晩生	85	大	濃 黄 緑	甲 豊 高 円	やや 開 張		○	◎	厳寒期に甘みの強い寒玉品種	38
ひめみつ (ボール系キャベツ)	平暖地					●	▲	—	—	—	—	—	—	—	中早生	70	中	青 緑 色	円	やや 開 張	○	○	◎	年内どりで甘みの強いボール系品種	39
Chou Frisé® (シューフリーゼ)	一般地					●	▲	—	—	—	—	—	—	—	中晩生	90~100	中	濃 青	扁 円	半 立 性	△	◎	◎	ヨーロッパ在来系で、特にちりめん(ネット)が強く、 外葉3~4枚付けて1.2kg以上に仕上げる	40
	高冷地	●	▲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—											



【おいしいキャベツを栽培するために】 とくみつ P 37 / ふゆみつ P 38

高糖度キャベツについて (弊社としての見解)

糖度は霜が当たり始める頃から高くなり始め、厳寒期に最も上がります。キャベツの葉緑素と根から吸収された成分から澱粉が生成され、結球部に蓄積されます。キャベツが一定の低温に遭遇すると、凍霜害から株を守るために澱粉を分解して糖に変え、糖の濃度が高くなるので甘くなります。その後、2月中旬以降の暖かい雨を受けると、糖度低下と水分が多くなってしまいうため、本来の甘さが損なわれてしまいます。これは、温度上昇に伴って植物の活動が活発になるため、蓄えていた糖分を消費し、糖度が低下します。そのため、2月中旬までに収穫を終えられることをお勧めします。

甘いキャベツとして出荷される場合、糖度の目安は、年内8度以上、年明け9度以上です。これらは、特別に選ばれた品種です。



追肥主体の栽培

「とくみつ」「ふゆみつ」は、生育が旺盛なため、初期に窒素を多く施肥すると、外葉が大きく育ちすぎ、玉の生育に勝ち負けが生じる可能性があります。また、玉が大玉になり、しまりが悪くなる可能性があります。そのため、追肥主体の栽培をお願いしています。元肥は、通常のキャベツ栽培の1/2位を施肥して頂き、1回目の追肥を定植後3週間前後で行い、中耕、土寄せを行なった後は、約1ヶ月間隔で生育中の肥料切れを起こさないように、追肥をお願いします。ただし、次の場合には注意が必要です。

- ①前作の肥料が残っている場合
- ②堆肥を元肥として入れた場合
- ③水田の後作での栽培が行われる場合
- ④肥沃な土地で栽培される場合

元肥なしで定植して頂き、活着し始めた定植後7~10日後に、元肥として使用される肥料の1/3の量を施肥、その後追肥を行ってください。追肥は基本的に3回が目安ですが、3回目は生育状況を見ながら行ってください。追肥主体の栽培のため、マルチ栽培や2条植えの栽培よりも中耕、土寄せが容易な1条植えでの栽培をお勧めしています。元肥1回の栽培をされる方でも、追肥栽培をお願いします。



【特殊キャベツを栽培するために】 シューフリーゼ P 40

栽培のポイント

播種を早め(7月下旬~8月上旬まで)に行なうため育苗管理が最大のポイントです。高温多湿に弱いので、ポット上げまたは仮植をし、寒冷紗などで暑さを避ける工夫をして下さい。9月になり朝夕涼しくなってから定植すると、植え傷みや初期の病気発生を抑えることができます。



日本全国、秋田から鹿児島まで、品種名で出荷されています。キャベツの品種名での全国リレーは日本初の試みです。



鹿児島、開聞岳のふもとで元気に育つふゆみつ。



加熱することで色が鮮やかになり料理を引き立てます。

